

作品集

二六六

「T君、甲府が火事でA家が焼けたぞ!」

「えッAが焼けたんですか」

と吃驚したT君の聲、皆の眼は役員様とT君の驚き顔とを交々注目した。その時役員様は僕を呼ばれた。僕はどきッとした。

「岡山のBさんの家が類焼したとの電話だ。御見舞電報を打つやう」

と云はれた。僕は餘りの事に敵きのめされた様に愕然とした。Bさんは僕の親戚だ。

「Aが焼たなら僕は行かなければならない」

T君は呆然と叫んで事務所へ走つて行つた。僕も電報を打つたが胸の鼓動は治まらなかつた。火事! いかなる人力人智を以つても自然に打ち捷つ事は出来ない。何處かで悪魔の巨手が人の幸を搔亂して居るやうな怖れを感じてならなかつた。今日は一日中、火事の悍から離れられなかつた。夕方寺平の焚火が夕闇の中に真赫な焰を掲げて居るのに恐怖を感じた。夜、床に就いたがこの寒空に焼け出されたB家族を思ふと寝つかれなかつた。(2)

鼠

宮崎泰賢

「ガタ／＼ゴツ／＼」晝眞だと言ふのに戸棚の中で微かな音

がする。「ははあ、チユウ公だな」と思つて「こらッ」と呶鳴るとびたりと運動を中止する。暫くすると亦ガタ／＼初め出す呶鳴る。止める。こんな事を二三回繰り返す。

一心に試験勉強をして居る身には、この木を囀るやうな微かな音さへも大きく耳にこたへて癢に障る。つと立つて戸棚の戸をガラリと開ける。今迄の音がばつたり止む。「捜し出さずに置くものか」と皿を除けたり壺をのけたり、だが天に昇つたか地に潜んだか、その影すら見あたらず。「まさか魔術を知つてゐるわけでもあるまい。何處にか潜んで居る筈だ」と念入りに隅から隅まで搔き廻す。チユウ公たまらず飛出す。

「そら逃げた」と追ひ廻すと障子の間に逃避行だ。アースを撒けたり、棒でつついたり、チユウ公居たまらず敷居を傳うて豆電車のように走り出す。「ソレツ亦逃げた今度は逃すな」と向ふに居る人にも頼んで狭打ちにすると、チユウ公め、得意の輕業で柱を駆け上り鴨居を傳つて逃げて仕舞ふ。噫、残念な事をした。腕が泣ッ面をする。

併し鼠は「命拾ひした」と天井の巢で安堵の胸をなで下して居るだらう。さう思つて天井を眺める。とチユウ公めさつき逃げ込んだ穴から澄まし込んだ、よそ行きの顔を覗かせる。

「こいつ、一筋縄ではいかぬ奴だ」僕はそう思つて残念だが鼠退治を諦めた。(1)